



## 赴任医師歓迎事業を実施しました！

3月29日(月)に、益田赤十字病院において新たに市内の病院に赴任された医師に歓迎の意を伝える「赴任医師歓迎事業」を実施しました。

昨年12月1日付で赴任された産婦人科の波多野医師に感謝と歓迎の意を伝え、市の特産品を詰め合わせた歓迎品を贈呈しました。



波多野医師からは「食事や観光など、市内を楽しみたい」と挨拶があり、青木副院長は「益田に来てもらって感謝している。これからも頑張ってもらいたい」と話しました。

益田の魅力を知ってもらい、1日でも長く益田で勤務してほしいと思います。



### 日本遺産のまち益田の歩き方

#### 第10回 みやけおどいあと 三宅御土居跡

最大の特徴は、東西に残る高さ5mの土塁どるいです。発掘調査により、南側にも高さ2mの土塁があったことがわかっていきます。益田川の水をひいた堀を周囲に巡らせ、堅固な防衛拠点としての機能も持っていたと考えられます。

一方、北側は堀に向かって降りることができ、雁木がんどぎ(階段)状に加工されていて、益田川の水運を利用して物資の輸送をしていたと考えられています。

建物の柱穴はしらあなの跡からは、12〜13世

#### 【問い合わせ先】

益田の歴史文化を活かした観光拠点づくり実行委員会  
文責：市文化財課 ☎ 31-0623

益田本町バス停のある交差点から北西方向に向かうと、益田川にかかる大橋があります。その欄干らんかんには、中世益田の領主益田家の家紋の一つである九枚笹くまいざさが刻まれています。さらに進むと道路の両側が開けた場所があり、ここが三宅御土居跡みやけおどいあとです。

三宅御土居跡は、益田氏の館跡です。館といっても、単に居住していただけではなく、地域を治めるための政治拠点、いざというときの防衛拠点など、さまざまな機能をあわせ持っていました。

その規模は、東西が約190m、南北が約110mです。同規模の領主の館が一般的に100m四方であることを考えると、その倍の規模を誇ります。

#### 【場】三宅町

石見交通バス各路線のバス  
益田本町バス徒歩5分

紀頃、15世紀頃、16世紀頃と建物が繰り返し建てられたようで、数百年間にわたり、この地域の中心的な拠点だったと考えられます。

館の北側の交差点まで来たら、東に向かってみましょう。北側から土塁を見ると、その大きさを実感できます。さらに東に向かうと、益田川から取水した水路が分かれるところがあります。この水路は乙吉や下本郷まで続いていて、かなり広い地域を灌漑かんがいしています。三宅御土居はこの水路を管理し、益田川の北側を開発するための拠点だったのではないかと考えられています。



昭和22年に米軍が撮影した航空写真。囲み部分が三宅御土居跡。その西側に水田が広がる。